宇都宮大学国際学部研究論集　2006，第22号，1－21

東アジアの近代と故郷

―国木田独歩「帰去来」と廉想渉「万歳前」―

丁　貴　連

一、故郷、異郷、そして帰郷小説

故郷、あるいは帰郷の問題を主なテーマにしている文学作品は洋の東西を問わず数え切れないほど多いが、それを日本の近代文学に求めるならば、宮崎湖処子の『帰省』（一八九八）をとりあげることができる。なぜなら、『帰省』は刊行以来多くの読者に迎えられ、明治年間のベストセラーの一つになったばかりでなく、文学史的にも帰省小説や田園小説といった新しい文学ジャンルを切り開き、明治二十年代の日本文学に故郷の意味を持ち込んだ作品だからである。北野昭彦氏は、『帰省』の人気の秘密を、「それまでの近代文学で扱われなかった地方出身者の内なる〈故郷〉の重さ、〈故郷〉との関わりを、初めて問題にして典型化し、文学世界に定着した点にある」[1]と指摘している。前田愛氏は、この故郷の意識に明治初期、一世を風靡した立身出世という思想が深く関わっていると、次のように語っている。

> 故郷の自然は都会の苛烈な生存競争が強いる絶え間ない内的緊張に休憩と慰籍をもたらす。（中略）このような故郷の役割が拡大され、立身出世の虚妄を自覚する契機に転化しているのが、宮崎湖処子の『帰省』である。（中略）故郷に帰省する船上から筆を起こした『帰省』は、立身出世欲に駆られて故郷を離脱した青年の軌跡を辿る『世路日記』とは対照的な地点にある。言い換えれば、立身出世をめざす青年達を取り上げた小説は明治十七年の『世路日記』から明治二十三年の『帰省』にいたって一つのサイクルを終えたのである。[2]

明治初期は、封建的身分制度が撤廃され、自己の努力と才能だけで道が開けるようになった時代である。中村正直は『西国立志編』（一八八〇）を、福沢諭吉は『学問のすすめ』（一八八〇）をそれぞれ翻訳、執筆し、人は生まれながらに皆平等なので誰もが努力すれば成功できるという立身出世思想を訴え、これらに鼓舞された多くの地方青年が立身出世を夢見て上京した。しかし、明治政府の体制が次第に安定していく二十年代になると、学問を万能とする立身出世の夢は政府の敷いたレールに乗った者だけに限られるようになり、多くの青年たちは挫折感を抱いたまま帰郷せざるを得なかった。『帰省』はちょうど立身出世思想が「急激に色あせていく明治二十年前後」に立身出世を目指して都会に集まりながら、そのことに懐疑的になりかけていた青年たちに熱烈に迎えられた作品である。とりわけ『帰省』に共感したのは国木田独歩、石川啄木、三木露風、佐藤春夫、北原白秋、萩原朔太郎、島崎藤村、室生犀星ら地方出身の文学者たちであった。[3]そして『帰省』は、同時代の文壇に強い影響を及ぼし、徳富蘆花・国木田独歩らの田園文学や自然文学、また島崎藤村や田山花袋などの、自然描写を足掛かりにした新しい文学の出現を促すことになったのである。[4]中でも独歩が、宮崎湖処子が切り開いた「ローカル・カラー（地方色）文学」[5]の系譜を引き継いで「帰去来」

（一九〇一）や「河霧」（一九〇二）、「酒中日記」（一九一〇三）などを執筆し、都会にも故郷にも定着し得ない、いわば「〈都会〉と〈田舎〉との二極を揺れ動く」[6]新しい人物像を造型し、明治三十年代の文壇に新しい故郷観を提示したことは周知の事実である。

ところで、故郷や帰郷、離郷は韓国の近代小説史においても重要なテーマの一つである。[7]戦前だけでも、李常春の「帰路」（一九一三）を皮切りに、朱耀翰「村の家」（一九一七）、廉想渉「墓地」（一九二二年、二年後の一九二四年「万歳前」に改題出版）、崔曙海「故国」（一九二四）、玄鎮健「故郷」（一九二六）、李益相「移郷」（一九二六）、趙明姫「洛東江」（一九二七）、韓雪野「過度期」（一九二九）、李箕永「洪水」（一九三一）、李泰俊「故郷」（一九三二）、李光洙『土』（一九三二）、沈薫『常緑樹』（一九三五）、李箕永『故郷』（一九三六）[8]などが書かれている。近代になって故郷や帰郷、離郷のモチーフを扱った作品が多く現われるようになった背景には、日本の植民地支配による国権喪失という深い傷跡が指摘できる。一九一〇年の日韓併合によって国権を失った韓国人には自分たちが生まれた土地、すなわち故郷しか残されていなかった。しかし、その土地でさえも朝鮮総督府の組織的な土地収奪政策によって失われてしまう。そのために農民のほとんどは寄生地主となった日本人の小作人に転落するか、貧困と圧政から抜け出すために何百年も暮らし続けてきた故郷を離れ、ユートピアを求めて満州、シベリアなどへと移住していった。しかし、他郷に行ったからといってどこにもユートピアなどはなく、貧困のどん底を流浪しながら再び故郷に戻ってくる貧しい農民が少なくなかった。しかし、彼らを待っていたのは暖かく迎えてくれる母なる故郷ではなく、搾取されて「墓地」のように荒れ果てた「故郷」なのであった。このような「故郷」の意識をはじめて近代文学に持ち込んだのが廉想渉の「万歳前」である。

廉想渉は、一九一二年十五才で渡日し、麻布中学校、京都府立第二中学校を経て一九一八年慶応義塾大学文科予科に入学するまでと、一九二六年から二八年までの二年間の文学修業の計約八年間、日本に滞在したことがある。この間、彼は日本文壇で一世を風靡していた自然主義の影響を強く受けるとともに、夏目漱石や高山樗牛、そして有島武郎ら白樺派作家の作品を読破するなど日本文学に心酔し、後に韓国近代文学史を塗り替える三部作「標本室の青蛙」（一九二二）「暗夜」（一九二二）「除夜」（一九二二）を書き上げている。この初期三部作に有島武郎の『生まれ出づる悩み』（一九一八）と「石にひしがれた雑草」（一九一八）が深い影響を及ぼしたのはよく知られた事実である。[9]確かに有島武郎文学の廉想渉への影響は従来の小説概念を打ち破る新たな「心理分析」方法を開拓し、それまでの文学とは一線を画すところとなった[10]が、実は廉想渉の日本近代文学受容は有島武郎だけではない。韓国近代文学史上初めて汽車と船、人力車を乗り継いで帰郷する様子を描いて注目を浴びた「万歳前」は、明らかに独歩の帰省小説「帰去来」の影響を受けている。

「帰去来」は、将来の妻と決めてある故郷の娘に求婚するため、はるばる東京から四年ぶりに帰省した主人公が、娘の死を契機に再び東京に戻る、という典型的な帰省小説である。廉想渉は、大都会に遊学中の青年が汽車や船などを乗り継いで帰郷し、故郷の風景や人々に触れるにつれて都会での奴隷のような生活がばかばかしく思われ、故郷への安住を考えつつも、ある事情によって再び都会に戻っていくという、従来の韓国文学にはなかった新しい小説ジャンルに目を瞠った。もちろん韓国にも故郷や帰郷をモチーフにした作品は古くから多く存在する。[11]但しこれらの古典文学に描かれた故郷や帰郷のイメージは、陶淵明の『帰去来辞』に象徴されるように、いわゆる安住・安息の地である。しかし、近代になって近代化や都市化、産業化によって故郷はもはや安住や安息の場所ではなくなりつつあった。そのことにいち早く気づいていた廉想渉は、大都会から帰郷した主人公が故郷への安住を考えつつも再び都会に戻っていくという新しい故郷観を捉えた独歩の「帰去来」に強く刺激されたのではなかろうか。しかも「帰去来」には、朝鮮貿易に従事するために、一島の住民の七割が釜山や仁川など、朝鮮に移住したという内容が盛られているので廉想渉にとって決して見過ごすことのできない作品であったと思われる。

廉想渉が独歩の作品を読んでいたという事実はまったく明らかにされてい

ない。しかし、「万歳前」は、妻の危篤の知らせを受けて久しぶりに東京から帰郷した主人公が、妻の死を契機に東京に再び戻っていくという作品である。しかも、汽車と船と人力車を利用して他郷から故郷、さらに他郷へ戻るという小説構造において独歩の「帰去来」から多くのヒントを得ていたことは間違いあるまい。何よりも廉想渉の創作欲をかき立てたものは、独歩の見い出した「故郷」の意味であろう。なぜなら、廉想渉は、独歩が描いた心の癒される美しくて優しい人たちの住む「ユートピア」としての故郷に、「墓地」という正反対のイメージを与え、そこから脱出しなければならない空間として捉え直しているからである。いったいなぜ廉想渉は「ユートピア」から「墓地」へとイメージの変容を行ったのか。その変容の背景を追っていくと、東アジアの近代化の過程がおのずと浮かび上がってくるはずである。

そこで本稿では、宮崎湖処子の『帰省』を源流とする日本の帰省小説が、どのような形で韓国の近代文学に表象されるようになったのか。またそれが文学的主題として結晶し、どのような姿で立ち現れるに至ったか。独歩の帰省小説「帰去来」を手がかりに、その過程に可能な限り近づきたい。

二、ユートピアとしての故郷

「帰去来」は一九〇一（明治三四）年五月『新小説』に発表され、後に独歩の第四文集『涛声』（一九〇七年五月）に収録された作品である。これは〈其一〉から〈其十九〉まであるところからも分かるように、独歩の作品の中では比較的長いものであるが、「長い丈面積は広いが、長さに比して深さは浅い。別に新しいと云ふ程のところもない」[12]と厳しい評価を受けている。しかし、帰省小説という視点から見ていくと、「帰去来」は宮崎湖処子の『帰省』を引き継ぎ、湖処子と同じく都市と故郷を対立させて故郷を肯定しながらも、その背後に朝鮮貿易に従事するために一島の住民の七割が朝鮮に移住したり、村の若者たちが次々とハワイへ出稼ぎに出かけるという「外部」[13]の視点を持ち込み、近代化の波に洗われて変貌を遂げつつある故郷の現実を浮き彫りにするなど、従来の帰省小説とは一線を画した作品である。但し、「この認識が、峰雄（「帰去来」の主人公）の故郷意識に何程の影響を与えているか不明である」[14]という指摘もあるように、従来「帰去来」は、独歩の明治二十四年、五年の失恋体験に基づいた「恋愛小説」もしくは「失恋物語」として読まれてきたきらいがある。[15]しかし、「帰去来」を帰郷を通じて故郷の現実を認識していくという帰省小説の視点から読み直すと、単に「恋愛小説」や「失恋物語」というだけでは片づけられない主題が内包されていることに気づく。[16]それをいち早く読み取っていたのはほかならぬ、韓国からの留学生、廉想渉である。廉想渉は、独歩の見いだした「故郷」から、韓国近代文学史上はじめて故郷喪失者の文学を描いている。そこでまず、「帰去来」に描かれた故郷とは一体どのようなものであったかを見ていくことにする。

「帰去来」は、志を立てて故郷を出、「東京で一個の職業を持てる、未熟ながらも既に世間に出て一人前の位置を占めて居」る吉岡峰雄という主人公が、未来の妻と心に決めてある故郷の娘を東京に連れて帰るために帰郷するところからはじまる。東京の新橋を出発して横浜、大森を過ぎた頃、汽車の窓から田舎の風景が見えると、峰雄は「あゝ此香だ、此香だ」とすっかり興奮し、「己は確に今わが故郷に帰りつゝあるのである」と四年ぶりの帰郷に期待をふくらませる。やがて故郷にたどり着いた峰雄は、四年ぶりに見る故郷について次のような感想を述べている。

> 二日前には東京に居て足を爪立て「将来」をめがけて駆け足をして居たのだが、今は故郷の丘に帰て、松根にどつかと尻を下ろして居る。騒々しい現から静かな夢の世界に入つたと言はうか将た、怪しい、重苦しい夢が忽然として醒め、長閑な、日の永い現の世界に帰つたと言はうか。[17]
>
> （三二五頁）

帰郷したばかりの峰雄の目に映った故郷は、将来をめがけて駆け足で走り続けていた東京とは違って、一日がゆっくり、静かに流れるため、時間に追われることもなくのんびりと暮らすことができる、まさにユートピアのような世界である。だが、村の若者たちはこのユートピアのような故郷を捨てて

遠くハワイにまで出稼ぎに行き、中にはアメリカの果てまで流れいき、そのまま消息を絶った者も少なくないという。峰雄はハワイへ出稼ぎに行った若者たちに、

故郷に於て確実なる生活の中、限りなき平和を享有し得る運命を棄てて、黄金の山でも発見するやうに、騒いで、浮立つて、天涯万里に流浪するのが目出度い事であらうか、幸福であらうか。

「何が不足なんだ！この長閑な、豊な、冬寒からず夏暑からず、四時の風向に富み、天の祝福を十二分に享けて居る村落に生まれながら何が不足なんだ！」自分は思つた。（三二七頁）

と反発するが、実は自分も故郷を飛び出した一人であると気がつくと、かねてより思っていた「『帰去来』の一念が火の如く燃え上が」り、「抑え難きプライド」を感じる。この〈帰去来〉の思いは、帰省二日目に懐かしい「高塔」の頂上に登って読んだジョンソンの『ラセラス伝』に誘発され、一挙に高まっていく。

松の根に腰をかけ、懐から一冊を取り出して膝にのせ、さて大空を仰ぐと、空は鋼鉄を張りつめたるかと思はるるまでに高遠一色、凝て動かず、太陽は、瞬きもしないで唯熟と下界を見つめて居るやう。ただ人に迫る一道の活気みち〳〵て、うつら〳〵と眠り且つ酔へる青葉の末よりは陽炎たちのぼり、正に天地の正気煥発して其極に至れりと覚えた。

（中略）

書はラセラス伝である、自分は幾度もこの書を読だ、然し依然として我が愛読書の一たる真味は失せない。読み〳〵て幾千もなく、身のこの谷に在るを忘れ、心はアビシニヤ「幸福の谷」を辿つて居る。ああ人は幸福の谷に住みながらも、年若き血は更に幸なる原をもとめて流れ出でんことを希ふものかなど思いつづけ、何時しか波瀾なけれども却て春海一望、霞の如きジョンソンの筆は自分を捉えて容易に放たず、斯くて時の経つのを忘れて居た。（三三二頁）

身は「幸福の谷」にありながらもさらなる幸を求めてさまようラセラスに強く心をとらえられた峰雄は、「幸福の国は何処にある」と自問し、ふと周囲を見回すと、故郷の自然がこの身を包んでいることに気づくのである。

峰雄は、帰郷するやいなや、早速幼い頃よく遊んだ丘や「高塔」に登って故郷の自然に触れた。そして、それらに触れるだけで「ただ理由もなく身が軽くなつて、気が確然りして、何か心に深く決する処あるかの如く感じ」たり、また「自然の不羈奔逸の気」が「勃々として自分に迫るを感じ」るのである。つまり、故郷の自然から「一道の活気」や活力を与えられていたのである。そのことに気がつくと、ジョンソンに導かれて探していた「幸福の国」とは、実はこの故郷の谷や山村といった自然にほかならないと確信する。すると、つい先日までの東京の生活がばかばかしく思えてならない。

自分は果して少の束縛を感ぜずして、都会の生活を楽（たのしん）で居るか。決して左うではない。虚栄の奴隷に非ずんば、奢侈なる遊戯の使童である。只だ日一日と何者か眼前三尺の先に浮動する処の金色体を逐ひつゝ生活して居るのである。少も落着いて、府仰して、此天地の生を受用する暇がないではないか、其上ならず、此事に付いては彼人、彼事に付いては此人と、夫れ〴〵。競争すべき人を有し、或は嫉妬し、或は羨み、或は冷笑し、或は崇拝す。見よ、すべて是れ奴隷の心情の狂態ではないか。（三三三頁）

峰雄は、故郷とは天から与えられた賜物であり、それを捨てて都会へ出たところで、奴隷のような生活が待っているだけであると反省した上で、「真の自由こそ真の幸福ではないか。真の自由は我が如き心に多少の準備ある者が田園の生活を営む事に依て始めて得らるる」ものであると自覚し、村の若者や自分が捨てたこの故郷の中に「真の幸福」と「真の生活」を見出し、故郷での田園生活を決意するのである。

三、「墓地」にたとえられる故郷

独歩の故郷観をひとまず前節のように捉えたのだが、それでは今度はそれを踏まえて廉想渉の「万歳前」に描かれている故郷について見ていきたい。「万歳前」は東京に留学中の主人公がソウルに残してきた妻の危篤の知らせを受けて帰国し、妻の葬式を終えた後、再び東京へ戻るという点において独歩の作品と類似しているばかりでなく、主人公の帰郷の旅を通して、故郷の現実を認識していくという点においても共通している。ただし、「万歳前」（初出は「墓地」）という題が示すごとく、故郷の現実は決して牧歌的な田園生活を志向する場ではない。それならば「万歳前」に描かれた「故郷」とは果たしてどのようなところであったか。「万歳前」は次のようにはじまっていることがまず注目される。

> 朝鮮に万歳が沸き起こった前の年の冬のことだった。その時、私は半分ほど受け終えていた期末試験を途中で投げ出して、急に帰国しなければならない用ができた。それはほかでもなく、その年の秋から産後の肥立ちが悪く長患いで臥せていた私の妻が、危篤だとの電報が舞い込んだためだった。[18]（五頁、白川豊訳、以下同）

「朝鮮に万歳が沸き起こった前の年」、すなわち一九一九年三月一日に起こった独立運動の前の年という時間設定が、この小説に登場する主人公の思想を規定している。抗日運動による国家への誇りと帰属意識、そして韓国人であることの自負。それらの自覚的高揚のまさに前夜ともいうべき年に小説のプロットを設定することは、この小説の主題をすでに暗示しているといってよいかもしれない。その独立運動の前年の一九一八年の冬、東京に留学していた李寅華は妻の危篤の知らせを受けて急遽帰国することになった。しかし、彼は妻の危篤の知らせを受けても何も感じない。なぜなら、そもそも彼の日本留学は韓国に因習的に残る早婚制度によって十三才で結婚した妻から逃れることが目的だったので、彼は再びその窒息しそうな家族の許へ戻るのが恐ろしかったからである。だから妻が危篤だという電報を受けとっても、なかなか出発する気になれず、好きな女給、静子のいるカフェを訪ねて別れの酒を飲み交わしながら時間を持て余すのである。静子の見送りを受けてようやく東京駅を出発した李寅華は、汽車の中でも病中の妻よりも静子のことを思い出し、神戸に着けば、一時期好きだった留学生の乙羅に会うなど、故郷の妻のことは全く眼中にない。今の彼は東京での自由な生活に満足し、そこを離れたくないという気持ちが強く働いている。

ところが、下関で釜山行の連絡船に乗ってから彼の意識に変化が現われる。それは、彼が朝鮮の留学生だという理由で刑事の厳しい取り調べを受けたことと、船の浴場で立ち聞きした日本人同士の対話がきっかけとなった。とりわけ、朝鮮の農民をだまして日本各地の工場や鉱山に売り飛ばしているという話には耳を疑った。

> 「しかし、朝鮮人らはどうです？」
> 「ヨボ【当時朝鮮人のことを軽蔑して使う言葉】のことですかい？若い連中は、それでもなついた方ですがね、田舎に行ったら台湾の生蕃よりましといえばましっていうことですかな。まあ行けばわかりますよ……ハハハ。」（四四頁）

「元々、政治問題には無関心」な気楽な留学生として自由奔放に暮らしていた李寅華にとっては、故郷が日本の植民地になっても自分とは無関係なこととしか思われなかった。しかし、故郷の人々を台湾の野蛮人にたとえる日本人の話に「憂国の士ではない」自分ですら憤りを覚え、今まで気づかなかった植民地下の故郷の実情に初めて気づかされて涙があふれ出る。こうした意識の変化は、故郷に近づくにつれてより一層強くなるとともに、その対象も植民地統治に対する怒りから、同胞への批判へと転じていく。

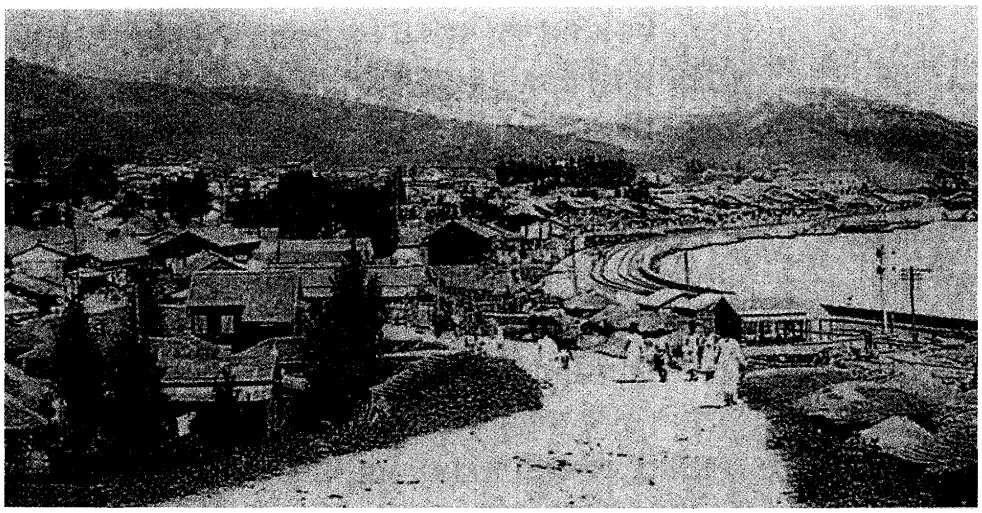
汽車と船を乗り継いで故郷の地、釜山にたどり着いた李寅華は、やっと故郷に戻ってきたという安心感から、今までいつも素通りしていた釜山の町が歩きたくなって市内に足を踏み入れてみた。

何よりもキムチが食べたかったし箸で食べてみかった。しかし、朝鮮人の店らしきものは影も見えなかった。たまに平べったい朝鮮家屋が目に入るけれども、近づいてみると、土壁を崩して日本式の窓枠をはめ込んでいないものがない。だがおかしなことは、いくらにもならない市街ではあるけれども大通りであれ裏道であれ、道を歩いている人の数で言えばまちがいなく朝鮮人が半数以上なのである。

「一体この人たちは夜になったらどこにもぐり込むんだろう？」と思うと、大いに不思議になると同時に、その哀れな白い着物を着た人々の運命を思いやらずにはいられなかった。（中略）こうして一軒減り、二軒減り、十軒減り百軒が減る間に、崩れかけた家は取り壊されていつのまにか新しい家が建ち、平屋は二階建てになり、温突が畳になって、石油ランプが電灯になるのである。（七一頁）

しかし、李寅華が目の当たりにしたのは変わり果てた釜山の風景である。朝鮮人の家屋や店らしきものはどこにも見あたらず、見えるのは日本式の建物や日本の食べ物を売る店ばかりである。そして、それらの店には日本人の夫に捨てられながらも女手一人で自分を育ててくれた朝鮮人の母を毛嫌いする日韓混血の若い娘が、日本から出稼ぎに来ている酌婦に混じって暮らしている。もはや釜山は「朝鮮を背負い立つ」「朝鮮を象徴した」かつての「聖なる釜山」ではなくなっている。しかも、釜山の人たちは自分たちの家屋や店や土地がいつのまにか日本人の手に渡っていることに対してまったく無頓着であるばかりでなく、むしろ自民族を卑下さえしている。李寅華は釜山のあまりの変貌ぶりに愕然とし、そそくさとソウル行きの汽車に乗って釜山を後にする。

しかし、ソウルへ向かう途中目にする故郷の風景と、そこに生きる人々の様子は釜山以上に荒れ果て、窒息しかけている。行く先々には、日本人の前では馬鹿になりすまして暮らした方が何事にも便利だという笠売りの男をはじめ、ろくに日本語も話せないのに朝鮮人であることをひたすら隠そうとする駅夫、日本人憲兵よりも悪質な朝鮮人憲兵補などのような卑屈や卑怯、屈服に馴れてしまった人々がうようよしている。李寅華はショックのあまり涙がにじみ出た。が、次第に腹の底から憤怒がわき上がってきて次のように叫ばずにはいられないのである。



【図１】日本式の建物が目立つ1910年代の釜山・草梁市街地

「墓場だ。ウジのわいている墓場だ！」と、私はうんざりしたように唇を噛んでみた。（中略）私はぐるっと一度見回してから、「共同墓地だ！ウジがうようよしている共同墓地だ！」と心の中で思った。

「この車内からして紛れもない共同墓地だ。共同墓地にいるからして共同墓地に入るのを嫌がるのだ。ウジがうようよしている墓地の中だ。すべてがウジ虫だ。おまえも俺もウジ虫だ。そんな中でも進化論的なすべての条件は一秒も欠けることなく進行しているんだろう！生存競争があり、自然淘汰があり、おまえの方が偉いだの俺の方が偉いだのと、騒ぎ立てるのであろう。しかしほどなく、ウジの一つ一つが解体されて元素になり土になって、俺の口に入りおまえの鼻に入りして、おまえも俺もくたばったら、遠からずまたウジになり元

素になり土になるのであろう。えいっ、くたばっちまえ！つぼみも芽もなくなっちまえ！滅びるままに滅びてしまえ！（一一九頁）

李寅華は、何もかも日本風に変わってしまった故郷の風景もさることながら、その中で無自覚、無関心、無感動のままに暮らしている故郷の人たちがまるで墓場に棲息する蛆のように思われて仕方がなかった。この思いはソウルで家族に会うと、一段と高まっていく。

なぜなら、彼は自分が墓地のようだと感じた故郷が、実は植民地支配による精神の荒廃の上にさらに封建的桎梏の下でも苦しんでいるという新たな事実を知るからである。問題は、率先して封建秩序を打破すべき上流階級の者たちが相変わらず封建秩序にどっぷり浸かって暮らしているということである。李寅華の家族はまさしくその典型であった。西洋医学をまったく信用しない父は「殺すにしても自分の手で殺す」といって嫁の乳腫に古い治療法しか用いず嫁を死なせてしまうなど家父長的権威を振りかざしている。小学校で教鞭を執っている兄は、妻がありながら跡継ぎの男の子がいないことを口実に平然と妾を同居させている。本家の跡取りだというだけで仕事もせずぶらぶら暮らしている従兄は新女性と不倫をしている。また、李寅華自身も妻から逃げ出して東京でカフェの女給と戯れている。それに金義官に代表される親日派や、乙羅に表象される自由奔放な新女性たち、卑屈や卑怯に慣れ親しんでいる民衆らは、まさに墓の死体にたかる「蛆」そのものであり、この蛆たちが、故郷をますます「墓地」化していくのだと、李寅華は確信するのである。そう思い至るや、もはや故郷は正常な人間が住める処ではないと判断し、この墓地のような故郷から一日も早く脱出しようと決心するのだが、この故郷からの脱出というモチーフは、ユートピア的な故郷が描かれている独歩の「帰去来」にも見られる。

四、「故郷」からの脱出と東京への回帰

「帰去来」の主人公吉岡峰雄は、東京から帰郷し、故郷の自然に触れるにつれて今までの都会の生活が「奴隷の心情の狂態」に思え、故郷での田園生活を決意する。だが、峰雄の〈帰去来〉の夢は、早々に破れ去り、再び東京に戻る決心をする。いったい何が彼を奴隷のような生活が待っている東京へ再び戻そうとしたのか。

実は、この四年の間に、峰雄の故郷にも近代化の波が押し寄せてきて安住や安息、ユートピアといったかつての故郷のイメージを一変させていたのだ。次の文はそれを象徴的に物語っている。

「徳三は達者かね。」（中略）
「徳三は此春布哇へ行きました。」
「さうか」自分は驚いた。
「菊蔵も行きました。」
「さうか。」
「私も行こうかと思て居ります。」（中略）
布哇出稼！これが我故郷の流行の一つとは兼ねて知て居たが、斯くまで村の若者相率ひてゾロ〳〵と出て行く程には思はなかった。中にも布哇から直ぐ帰らないで亜米利加のはてまで流れ行き、其儘消て了ふ者もある。それやこれやで出稼のために我故郷では色々の悲しい痛ましい説話が幾多も出来て居るのである。（三二六頁）

村の若者たちは豊作続きだというのに次々とハワイへ出稼ぎにゆく。峰雄は「長閑な、豊な、冬寒からず夏暑からず、四時の風向に富み、天の祝福を十二分に享けて居る」このユートピアのような村落を捨てて、遠くハワイにまで出稼ぎに行くことに強く疑問を感じ、「故郷に於て確実なる生活の中、限りなき平和」を送るべきだと考えている。しかし、故郷の現実は、峰雄が考えるような純朴な人々が住むユートピアではなくなっていた。村の若者たちのハワイ出稼ぎの背景には、実は次のような事情があったのである。

一八八〇年初頭に、松方財政のデフレ政策がもたらした農村の深刻な

疲弊があった。農村では激しい農民分解が起きたが、土地から遊離した貧農を吸収する近代産業は、当時まだ育っていなかった。ハワイ官約移民は、北海道移民とならんで、この事態に対処する日本初の人口調整政策であった。最初の渡航では六〇〇人の募集に対して二万八〇〇〇人もの応募者があったという。日本社会の中に、出稼ぎへの切実な欲求が構造化していたのである。[19]

明治維新後資本主義の発展に伴い、近代化に取り残された農村では農民層の分解が進み、一八八〇年代から九〇年代にかけて多くの農民が小作農に転落した。[20]彼らの多くが経済的に窮乏を極める家計を助けるために東京や大坂などのような大都会ばかりでなく、遠くハワイや朝鮮といった海外にまで出稼ぎに出かけ、低い賃金と劣悪な労働環境の下で働かされていたことはよく知られた事実である。つまり、村の若者たちが住み慣れた故郷を捨ててハワイへ出稼ぎに行った背景には近代化に取り残された農村社会の停滞があったのである。

しかし、「帰去来」にはこうした農村の抱える問題を、故郷の不動産を叔母に任せて東京で生活する「地主階級の息子」の視点からしか見ていないので、窮迫した家計を助けるために出稼ぎに行く村の現状が十分に作品に反映されておらず、主人公の田園志向だけが強調されているのである。

そして、物語は後半に行くと、主人公の夢は結婚を夢みていた娘の死により無惨にも破れ、東京へ戻る決意をするという失恋モチーフの作品にすり替られてしまうのである。この主人公の恋人の死は、実は「万歳前」（妻の死に変えられている）にも設けられていて、しかも作品の中で象徴的な意味を持っている。そこでまず「帰去来」から見ていくことにする。

「帰去来」の主人公峰雄は、村の娘小川綾子との結婚の目途をたてるために四年ぶりに帰郷するが、この四年の間に、若者たちが次々とハワイへ出稼ぎに行き、また朝鮮貿易に従事するために馬島の島民の七割が朝鮮に移住するなど、村は近代化の波に洗われていた。しかし、峰雄にはこうした故郷の変貌ぶりもさることながら、綾子との結婚話が気になって仕方がない。滝藤満義氏も指摘しているように、当時の若者にとっての故郷とは「理想の妻と不可分に結びつけられてい」[21]た。つまり、理想の妻がいるからこそ故郷に思いを馳せるのであって、その対象がいなくなると、故郷そのものが束縛だと感じ、そこから解放されようとする。峰雄も、恋人綾子がいるからこそ故郷での田園生活を夢見たのである。しかし、四年ぶりに帰郷してみると、肝心な綾子の態度がどうもおかしい。さらに小川家の下男五郎からは綾子が朝鮮へ嫁ぐことになったことや、自分の「情婦」である、という恐ろしい事実を暴露される。峰雄は憤って、事実を確かめもせず故郷を飛び出してしまう。それから二週間ほど近所を彷徨った末に、あれほどまでに夢見ていた田園生活をいとも簡単にやめて東京に戻る決心をするのだ。やはり峰雄を捉え続けていた故郷も「理想の妻」あってこそだったのであろうか。実は峰雄の故郷認識はそう甘くない。

【図２】ハワイの甘蔗農場で働く日本人女性たち

叔母の家に戻った峰雄は、綾子の死を知ってひどく傷つく。そこに生前の綾子の手紙が届けられる。

「突然の御出立につき御心のほども相わかり其夜は悲しく泣き明し候私の口よりは何事も申上げ兼候何にも姉より御聞取り被下度く候遠からず朝鮮へ参る身には今一度お目にかゝり度く願へどそれもかなはず候随

分御身を御大切に御出世のほど陰ながら祈上候なほ幾末永く御忘被下まじく候」（三五四頁）

峰雄は、綾子が自分のことを慕いながらも、父の意志に従おうとしたがために事故で死んだという事実を知る。綾子を将来の妻として思慕し、自由な生活を夢見て故郷での田園生活を決意した。しかし、その故郷は、実は娘の結婚に本人の意志よりも家を優先する家父長の意志がいまだ絶対視されている封建社会であり、豊作続きだというのに次々とハワイへ出稼ぎにゆく若者が続出する停滞した社会だったのである。このような故郷で綾子は死んでいったのである。

峰雄は自分の思い描いていた田園と現実の故郷との間に大きな隔たりを感じる。牧歌的趣味を満たすところだと思っていた故郷は、実は都会よりももっと低次元な人間関係が存在する前近代的な封建社会だったのである。しかもその因習的な制度は、一帰郷者に過ぎない彼にはどうすることもできない壁であった。[22] 綾子のいない故郷にもはや居る必要がなくなった峰雄は次のような言葉を残して東京に戻る決心をする。

不羈、独立、自由！人は此地上に於て其十分を享有すべき約束を持て居ない。

「戦闘！さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ。行かう、明日立たう、明日！」（三五九頁）

峰雄は今まで「面白くないやうなら、何時でも、直に足の塵を払つて此故郷に帰て来る」と思っていたように、故郷を東洋的理想郷としての「田園」と考えていた。しかし、綾子の不遇の死を知って、田園趣味という空想を抱いたままでは、とうてい故郷の生活になじむことができないことに気がつく。そして、彼は「戦闘こそ人の運命」と悟り、新たに現実を変革する「戦闘」を誓って、再び東京に戻っていくのである。

このように見てくると、綾子の死は主人公の内部に醸成されていた牧歌的な自然観と結びついた「田園」の死を象徴していると言えよう。こうして、峰雄は綾子の犠牲を通して、自由な人間性をを圧殺する不条理に対抗するためにも再び東京での閉鎖的ではあるが、それでも学問のできる場に戻って奮闘しなければならないと決心するのであった。

この故郷からの脱出と東京への回帰という主題を支えるプロットは廉想渉の「万歳前」にも見られる。廉想渉の「万歳前」は三・一独立運動が勃発する前年の朝鮮の状況を、日本に留学している一人の留学生を通して痛烈に批判・糾弾させた作品である。確かにこの作品を読んでみると、そこには植民地の現実が鋭く観察され、批判されている。しかし、問題は植民地に対する批判が外部から加えられるに留まらず、内部の矛盾にも及んでいることである。次の文はそれを雄弁に物語っている。

朝鮮人は外国人に対して何にも見せてやれなかったが、ただ夜が明けさえすれば寝床から煙草に火を付けるということ、朝から飲み屋が繁盛するということ、親であることを笠に着て、わしがおまえの親父だとか、おまえはわしの孫だと言っては自分は遊んで歳月を送るということ、やっと言葉をしゃべるようになった幼児が皮肉り言葉から覚えるということ、殴り合いならぬ口喧嘩に夜明かしして、翌日は真昼になってやっと起きだすということ……、その代わりに科学的知識といえば、釜の蓋が重くなければ飯がよく炊けるということも知らないということを外国人に実物で教育してしまったというわけなのである。だから、彼ら外国人が朝鮮に長らくいるということは彼らが我々を軽蔑してもいいという理由と原因を数多く収集したという意味にしかならないのである。（七七頁）

李寅華は、朝鮮という「故郷」が抱えているさまざまな問題点を赤裸々に批判する。とりわけ、封建的な因習に対する批判はたとえ家族にかかわることであっても容赦しなかったことはすでに見てきたとおりである。こうした「故郷」やそこに住む同胞に対する批判は最終的には植民地統治下の故郷を「共同墓地」に、そこで民族としての自覚も持てずに卑屈に生きている人々

を「ウジ」に見なして罵倒することになる。この「墓地」のような故郷で彼の妻は死んでいった。しかし、この妻の死について彼が次のように自省するところは注目すべきであろう。

私は自分自身を救わねばならぬという責任があることを悟ったのです。自らの道を探り当て、開拓していかねばならない、自分自身に果たした義務があることを悟ったのである。私の妻はとうとう苦しみの多かった命が尽きました。彼女は決して死んだのだとは思えません。なぜかというと、その夫である私に、「おまえを自ら救え！おまえの道を自ら切り開け！」という、しおらしくも大切な教訓を与えて行ったからです。（一五五頁）

李寅華は妻の不遇の死をきっかけとして自分に背負わされている責任が何かをはじめて自覚する。それは何よりもまず、家族をはじめとする故郷の人々が陥っている封建的因習を打破することであった。だからこそ、彼は妻の葬式で、家族の反対を押し切って五日葬の代わりに三日葬を、そして祖先代々の墓ではなく共同墓地に埋葬する。この主人公の決意と行動には象徴的な意味が秘められている。つまりそれは、植民地という共同墓地の中で暮らしていることの自覚もなく因習の中から一歩も出ることなしに、逆に共同墓地に埋葬されるのを卑しむような同胞への警鐘なのであった。

東京から故郷へ、そして再び東京へ戻る過程で行われた同胞に対する批判と啓蒙は、つまりはこの妻の死に収斂していくためにあったといってよかろう。日本人巡査や憲兵よりもっと残酷な朝鮮人巡査や憲兵補、朝鮮人の母の血を受け継いだ自己の運命を呪う釜山の混血の酌婦、ソウル行の汽車の中で見た卑屈な朝鮮人の群像、金義官や父に代表される親日派の人々、封建的因習に閉じ込もって民族と国家の主体性に対して無自覚なままに生きている同胞への厳しい批判は、いうまでもなく朝鮮という「故郷」の人々に主体的な民族意識と抗日の意志を呼び起こし、反省と覚醒を促すためであった。作品の時代設定を三・一運動の前年に置いた理由はまさにここにあったのである。

妻の死後、東京へ戻ることになる李寅華の精神状態が、東京に居た頃とはまったく変わったということは静子に送った手紙から認められる。

私はなぜ帰国したのだろうかと思って、自分の愚かさを自ら嘲笑してみました。そうして今晩にでも出立ちしなければならぬと決心までしたところです。しかし、こういうすべてのことを考えてみると、ここに帰ったことは決して無意味だとは思えないのです。事実、今回帰って妻を亡くして行くのです。けれども私は亡くして行くのではなく、何かを得て行くのだとしか思えないのです。ともかく我々は自分たちの道を求めて出て行きましょう。（中略）現実を正確に洞察しながら自らの道を力強く踏みしめて、しっかりと生きて行かねばならぬという自覚だけを、すすんで自らに強いるべきことを悟らねばならないと思うのです。（一五六頁）

政治などにはまったく関心のない一留学生に過ぎなかった李寅華は、帰郷の旅を通して、故郷の置かれている歴史的現実に目覚め、妻の死を契機に「現実を正確に洞察しながら自らの道を力強く踏みしめて、しっかりと生きて行かねばならぬという自覚」をするようになる。

こうした意識の変化は、「故郷」をいったん自己から引き離して他者の眼で見られたから生じたものであろう。この他者の眼をもって故郷を批判し、啓蒙しようとする行為は、故郷に愛情を持っていることの逆説的な証明といえる。李寅華は「故郷」の抱えている様々な問題を内部と外部の両方から批判することによって無気力と無知と偏見に陥っている「故郷」の人々に自覚を促し、失った民族と国家への誇りを再び得させようとしたのではなかろうか。だからこそ彼はあらためて東京へ戻らねばならないのである。

以上のように見てくると、独歩の「帰去来」と廉想渉の「万歳前」の主人公たちは恋人や妻の死を契機に、それぞれの故郷が抱えている様々な問題に気づき、そして新たな決意の下で故郷を出て東京へ回帰する人物として描かれている。この共通するプロットを持つ二つの作品は、社会状況と時代的背

景こそ違うが、類似性を感じさせる点も少なくない。それはいうまでもなく、東アジアの村落社会に共通する前近代的で封建的な因習の支配する「故郷」からいったん自己を引き離すことで、あらためて他者として「故郷」の負の側面を痛烈に批判する主人公の姿勢にほかならない。

五、「故郷」の中の女たち

ところで、両作品における「故郷」は前節まででみてきたように、自我の伸張を妨げる停滞した前近代社会として描かれている。そして、その犠牲になるのは男性ではなく、多くは女性である。近代化とともに停滞する村落社会を見限って多くの若者は都市をめざして故郷をあとにした。また故郷も都市での出世や成功を願って若者を送り出した。彼らは立身出世の時代思潮に促され、「故郷に錦を飾る」ために次々と村落社会から出ていった。しかし、故郷を抜け出したのは男性の若者たちだけであった。[23] 残された女性たちは「故郷」の中で古い慣習や道徳に支配された家を守りながら、故郷を出た男性たちが成功して帰ってくるのをひたすら待ち続けた。

「帰去来」と「万歳前」における女性の登場人物の場合はどうであったろうか。まず、「帰去来」の峰雄の恋人、小川綾子の場合を考えてみよう。「帰去来」の主人公吉岡峰雄は、故郷の財産を叔母にまかせて母と二人で東京で生活する青年であるが、今度四年ぶりに帰省するのは表向きには、亡父の墓参だが、実は故郷に将来の妻と心に決めた小川綾子という美しい娘がおり、この綾子に会うためであった。しかし、帰省してみると、綾子は父の一存で決めた男と結婚することになっていた。綾子は峰雄を慕っていたし、村の人々も二人の仲を噂していた。ところが、小川家の下男五郎が半年前から綾子につきまとって、「若し何処かに嫁くやうなら必定邪魔してやる」と脅迫するので、小川家では処置に困っていた。五郎を追い出しても、行くところがない彼はまた戻ってくる。処置に困った父は、ひそかに、貿易先にあたる朝鮮の日野屋という大問屋へ綾子を嫁がせる約束をしてしまったのである。その約束は父が公表するまで誰も知らなかった。当人の綾子にさえ秘密にされていた。

父が此春朝鮮に参りました時、日野屋といふ大問屋へ妹を嫁ることに略約束したらしう御座ります、私共も真実此頃までは何にも知りませなんだ。さうすると、先達日野屋の若旦那が番頭を連れて突然やつて来て、其時初めて父は約束のことを妹や私に話しました。妹は此話を聞いた時、唯黙つて居りました。私は妹が如何する積りだらうと其晩聞いて見ましたら、父が一度約束して、先方が又た彼アやつて来た以上は嫁く、と申しました。（中略）

「未だ結納が済まんのだから今の中、父へ話して如何にか為て貰へと申しましたら、其れでは父の立瀬がなくなり気の毒だから、黙て嫁く、自分は全然あきらめたと申しました。」

これ犠牲である。自分は最早此上を聞くことが出来なかつた。

（三五七～八頁）

綾子が峰雄を慕いながらも絶対的な父の権威に逆らえず、自己の一生を犠牲にすることがすでにここで予兆されている。綾子の父は娘の結婚には本人の意志よりも「家」を優先する家長であった。また、綾子も「柔和な気質、能く事に堪え忍ぶ」性格であるがゆえに父に自己を主張することができず、父の意志に従う伝統的な従順さから脱け出せないでいる女性である。姉の露子も同じで、妹の綾子に同情する優しさはあっても、「家」の家長である父に対しては無力な存在である。近代化の波が村落に押し寄せるとともに「故郷」を出た青年たちが自我に目覚め、家が象徴する家父長制度に対して葛藤していったのに対して、女たちは「故郷」の中にとどまり、旧来の思想の中に閉じ込もって生きていくしかなかった。

「故郷」の中の女たちが前近代的な封建性と絶対的な家父長の権威に自己を埋没させられている状況は、「万歳前」の場合にも重要な小説の枠組みをなしている。主人公の李寅華はお産の後遺症で乳腫にかかり、長く患っていた妻が危篤に陥ったという知らせを受けて急遽帰郷する。一年半ぶりに昏睡

状態の妻と対面した彼は、かわいそうだとは思いながらも、東京にいるカフェの女給、静子を思うほどには妻には愛情を感じない。

嫁入りなどといっても私と一緒に暮らしたのは日数を数えると何日にもならないであろう。私が十三才、本人が十五才でハトの巣箱ともいうべき、ままごとのような新婚の部屋を構えたので、十年間も夫の家で仕えたことになる。しかし、私が十五才に東京に逃げ出したから、実際は夫婦といっても名ばかりだ。大晦日に嫁に来た新婦が正月一日にそのまま嫁入りしてから二年になると言うようなものである。

（一四二～三頁）

妻は典型的な封建的大家族制度の下で嫁いできた女性であった。結婚してから十年が経ったにもかかわらず、夫と暮らした期間はわずか数ヵ月に過ぎない。夫は留学という名目で日本へ去ってしまい、残された妻は夫の帰りをひたすら待ちながら、過酷な日々を耐えしのんでいた。そんな妻の生活とは裏腹に、夫は留学先の東京で静子という日本人女性や留学生乙羅に愛情を感じるようになり、妻のことは一度も思いやったことがない。結局彼女は新婚生活の楽しさすら十分享受できないまま、夫や家族の因習的意識と無理解の中で死んでいった。人生の中で最も楽しい時間を過ごすべき年令であったにもかかわらず、前近代的早婚制度の犠牲となって死んでいく彼女は、まさに封建的因習に支配された村落社会の犠牲者である。その具体的表象として家父長の権威が彼女にのしかかってくる場面を見てみよう。

「そういう乳腫だったら総督府病院へ行って早く腫れものをつぶしてもらったらよかったんでしょうがね。」と一言言ったところ、

「近頃の西洋医に何がわかる？おまえの兄もそんなことを言うもんだから、死なせることになっても、わしの手で死なせると言ったんじゃが……」

と、怒るのであった。私は黙り込んでしまった。

（一二五～六頁）

李寅華の妻の病気は西洋医学で治せる病気だったにもかかわらず、西洋医者を嫌う父が古い治療法に固執したせいで、結局病気はとりかえしがつかなくなった。が、誰一人父には逆らえなかった。父の絶対的な権威が病気を悪化させ、妻はその犠牲になったのである。それにもかかわらず、父は嫁の病気を心配するよりも、家長としての権威を第一に考える人物だった。

このように、綾子と李寅華の妻は「家」の権威を第一に考える家父長制度や、あるいは前近代的な早婚制度の犠牲になった人物である。立身出世を目的として、封建的な束縛から自我を解放すべく故郷を飛び出し、都市へ出ていった男性たちに対して、「故郷」に残された女たちは、旧来の因習と思想のなかに閉じ込もり、ただひたすら男たちを待つだけの無力な存在であった。「故郷」を飛び出して都市の市民生活を経験した独歩と廉想渉は、だからこそ、そのような「故郷」の中の女性の生を不条理とみなし、その不条理を打破すべく戦おうとしたのではなかろうか。

六、異郷としての釜山

ところで、「帰去来」と「万歳前」にはともに釜山に関する記述が見える。独歩の「帰去来」では、島民の七割以上が釜山に移住したという話が、廉想渉の「万歳前」では、押し寄せてくる日本人の増加に伴って釜山の街並みがすっかり日本風に変えられたという事実が描かれている。この「帰去来」と「万歳前」に描かれた釜山の描写の違いは、いみじくも釜山の異郷化の過程を物語っている。そこでまず、「帰去来」から見ていくことにする。

主人公の吉岡峰雄は、帰省中に将来の妻と決めてある小川綾子の自宅の離れで過ごすのを何よりの楽しみにしていた。帰省するやいなや早速小川家の離れの様子を聞き出したところ、離れにはすでに客が留まっているので一週間ほど待ってほしいという予期せぬ返事が返ってきた。峰雄は一瞬戸惑ったが、朝鮮からの客だと知ると、直ぐ気を取り直した。なぜなら、

小川は朝鮮貿易を重なる業とし、朝鮮釜山には多くの知人、のみなら

ず親戚すらある家ではないか。殊に麻里布村の者は沢山釜山に移住して居る。朝鮮貿易をする者は小川の外、麻里布には猶ほ四五軒あつて、皆五十噸、七十噸、乃至九十噸までの合子船を四五艘も持て居るのである。「朝鮮」の語は麻里布では少も外国らしく響かない、東京大阪といふよりも今少しく近しく思はれて居るのである。且つ同村の中に編入して有る馬島、麻里布の岸から数丁隔つる一小島の住民の七分は已に釜山仁川等に住居して、今は空屋に留守居のみ住で居る次第である。（三二九頁）

というように、朝鮮貿易を主なる業としている小川家に朝鮮から客が訪れることはよくあることだと認識したからである。

すでに第四節で指摘したように、一八八〇年代から九〇年代にかけて広島をはじめ、山口、熊本、福岡といった中国・九州地方では海外移民や移住する者が多かったが、中でも山口県熊毛郡はハワイ出稼ぎ労働移民とともに朝鮮にも多くの者が移住したことで知られる。[24] ハワイ移民が多かった熊毛郡内の中で、とりわけ麻里布村は人口の九割以上が朝鮮への渡航を経験し、馬島などは独歩も指摘しているように、一九〇三年時点で総戸数の七四・五％にあたる七九戸が朝鮮に移住するなど、もっとも頻繁に朝鮮進出が行われた地域である。ハワイや北米への農民による出稼ぎ労働移民と異なり、朝鮮への進出は商業を中心とした朝鮮貿易が特徴であり、その起源は江戸時代まで遡ることができる。しかし、本格的な朝鮮貿易及び進出が始まるのはやはり一八七六年の日朝修好条規による釜山開港以降である。

明治維新後、朝鮮への進出を図っていた日本政府は、開港直後江戸時代に日朝交渉の窓口が置かれていた倭館の広大な敷地に早速日本人居留地を設置し、この居留地をめざして馬島をはじめとする西日本よりさまざまな日本人が渡航してきた。初期の居留民たちは徒手空拳の渡航者が多く、雑貨や綿布、塩などを朝鮮に搬入し、金や穀物を搬出する個人的な貿易に携わっていたが、[25] 日清・日露の両戦争をへて日本の勢力が強まるに伴って貿易量も拡大し、やがて「帰去来」の小川家のように朝鮮貿易で財をなした「朝鮮成金」[26]も現われるようになったのである。

【図３】麻里府より馬島を望む

独歩は、一八九一年五月、熊毛郡麻郷村に帰省し、翌年六月まで麻郷村を中心に麻里布村、平生、柳井で過ごした。この一年間の体験は後に「熊毛もの」といわれる一連の作品群を生み出すなど独歩の精神世界に強い影響を残しているが、「帰去来」は麻里布村を舞台にした作品である。ちょうどその頃の麻里布村は「男のほとんどは朝鮮貿易のために、あるいは遠洋へ出魚のために不在で、女のみのきわめて淋しい」[27]所であった。つまり、現実の麻里布村は田園生活を満喫するようなユートピアではなく、近代化に取り残された貧しい漁村だったのである。独歩は麻里布村に滞在中、ハワイ移民や朝鮮貿易で栄える村の背後に、明治維新による急激な社会変化によって多くの地場産業が衰退し、再編を迫られた農・漁村の人々が新たな活動場所を求めて朝鮮やハワイなどへの移住を余儀なくされているという事実[28]を垣間見ていたに違いない。だからこそ十年後の一九〇一年に「帰去来」を執筆し、馬島の住民の七割が住み慣れた故郷を捨てて異郷の地・釜山へ移り住むという現実を描いたのである。

このような独歩の作品は当然韓国からの留学生にも瞠目されていた。中でも廉想渉は、併合前から多くの日本人が釜山に移り住んでいる様子を描いた独歩の作品から、植民地下の釜山の運命を見通した「万歳前」を執筆し、一九二〇年代の韓国文学に「故郷」の意識を持ち込んだ。そこで「万歳前」に描かれた釜山について見ていくことにする。

妻の危篤の知らせを受けて急遽帰郷することになった主人公の李寅華は東京から神戸を経て、下関で関釜連絡船に乗った。久しぶりに乗った船の中は朝鮮に渡っていく日本人で一杯である。朝鮮事情に詳しい商人から憲兵隊に勤務する兄を訪ねていく人、金融ブローカーのような人、はじめて朝鮮を訪れる純朴な田舎者まで、実に様々な日本人が住み慣れた故郷を離れて異郷の地へ旅出とうとしている。彼らは異国生活に必要な情報を交換し合い、まだ見ぬ未知の世界に胸を弾ませていたが、その会話からすでに大勢の日本人が釜山をはじめとする朝鮮各地で我が物顔に暮らしている様子が窺え、李寅華は驚く。

もともと政治よりも芸術や文学を好み、自由気ままな留学生活を送っていた李寅華は、これまで国が滅ぼうとが、釜山が外国人の手に渡ろうが、自分とは関係のないこととばかり思っていた。しかし、「亡国の民」になってわずか十年足らずで日本の勢力が朝鮮各地に及んでいるという事実を知らされると、さすがの彼も故郷や故郷の人々の生活が気になってきた。とりわけ、開港以来日朝貿易の拠点として注目を浴びるようになった釜山には関心を示さずにはいられなかった。というのは、釜山には一攫千金を夢みる渡航者が日本各地から押し寄せてきており、釜山市内には本町通りや黄金通り、蓬莱町、緑町といった日本式の地名や瓦屋根、ガラス戸、格子窓、畳部屋といった日本式の建物、「旅人宿」「呉服屋」「サクラビール」といった日本語の看板、そして和服姿の日本人で占められていたからである。

しかしながら、李寅華はこれまで一度も釜山市内の見物をしたことがない。留学先の日本と故郷のソウルを行き来する際にいつも釜山港を利用しているにもかかわらず、実は、釜山に渡っていく日本人たちにはほとんど関心を示さなかったのである。だからこそ、今回の帰郷の際に乗った船の中ではじめて朝鮮に渡っていく日本人渡航者の実態、すなわち現地の朝鮮人を馬鹿にしたり、朝鮮各地の農村から百姓をだまして日本各地の工場や炭鉱に売り飛ばしたりしているという事実を知った時はショックのあまり涙がにじみ出た。「世間知らず」の留学生として自由気ままに暮らしている間に、故郷の農民たちは何百年間住み続けた故郷を離れて異郷の地へ労働者として売られるという過酷な生活を強いられていたという現実に思いを馳せると、李寅華は居ても発ってもいられなかった。やがて船が釜山港に着くと、いつもは素通りしていた釜山市内に入って久しぶりに朝鮮料理でも食べてみようと決心し、李寅華は朝鮮料理の食堂を探しだした。

埠頭を後にして西に曲がって電車道に沿って大通りをどんどん歩いたが、左右には二階建ての家がどこまでも続いていて朝鮮家屋らしきものは一つも目に留まらない。一、三町も行かずして電車道は北の方に曲がっていて、向かい側には色とりどりの芝居小屋なのか映画館なのか、はでな絵看板やらのぼり旗が目に付くばかりだった。三叉路に立ってしばし四方八方を眺めやったが結局、通りがかりの担ぎやの人夫に朝鮮人町はどこかと聞いた。担ぎ屋はしばらくためらい勝ちに考え込んでいたが、南の方に海へと通じる道を教えてくれながら、そっちへ行けば何軒があると言う。私は教えられた通りに踵を返した。生臭くもあり、腐ったような匂いが鼻を突く海産物倉庫がちらほうと建っている間の道を抜けて、あっちにつっかえこっちにつっかえしながら分け入ると、海辺に抜ける汚く狭い路地が現れた。やたらと乱造された粗末な二階建家が左右に五、六棟ずつ並んでいるのは朝鮮人の家のようには見えないが、あちこちの玄関口から出入りする人たちは朝鮮人である。あの家この家と覗き込みながら通り過ぎようとしていると、ある家の二階に長鼓を立て掛けてあるのがガラス越しに見えた。しかし、表にはたいてい旅人宿という看板を掛けてあった。ちょっと見るだけで、こういう港町にはよくあるそういう種類の商売をするところだというのがはっきりわかった。しかし女の姿はまったく見かけなかった。（七〇頁）

ところが、探していた朝鮮食堂や家屋らしきものはどこにも見当たらず、目につくのは二階建ての日本家屋や日本の食べ物を売る店と日本語の看板ばかりである。すっかり変わり果てた釜山市内の様子に、李寅華は自分が故郷に帰ってきたのか、それとも異郷に帰ってきたのか分からなくなって通りが

かりの人夫を捕まえて朝鮮人街を聞き出す。やっと教えられた処にたどり着くことは着いたが、朝鮮人街は市内の中心地から遠く離れた郊外にあるばかりでなく、何もかも日本式に変えられていた。東京で女給の静子や留学生の乙羅にうつつを抜かしている間に、釜山市内は押し寄せてくる日本人渡航者に追われて姿を消した朝鮮人の代わりに、日本式の生活習慣や文化が幅を利かせる日本人の街となっていたのである。朝鮮人のいなくなった釜山市内を歩きながら、李寅華は、かつて日本との交流の玄関口として重要な役割を果たしていた釜山が、今や日本の地方都市の一つに転落してしまったと嘆き、変わり果てた釜山の姿から朝鮮の運命を想像するのだった。

釜山といえば朝鮮の港としては第一流であり、朝鮮の重要な門戸であることは小学校にひと月通っただけでも分かることである。事実、釜山は朝鮮の唯一の代表なのである。朝鮮の縮図、朝鮮の象徴はやはり釜山なのである。外国の遊覧客が朝鮮を見たいというのなら、まず釜山に連れて行って現物させれば充分であろう。聖なる釜山！朝鮮を背負い立つ釜山！釜山の運勢が朝鮮の運勢であり朝鮮の運勢がすなわち釜山の運勢であった。（二六九頁）

一八七六年の開港以来、釜山は日朝貿易の拠点として、また日本や朝鮮半島、中国大陸へ渡る第一の関門として、経済的にも政治的にもまさに朝鮮を代表する港町として発展を遂げていった。しかし、それはまた朝鮮の日本化の始まりをも意味していた。開港当初日本各地から渡ってきた渡航者たちは日本との玄関口である釜山に定着し、生活の基盤を作っていた。しかし、植民地勢力が強化されていくにつれて、次第に金泉、秋風嶺、永同、沈川、大田をへてソウルへと続く京釜鉄道や京義鉄道といった駅や港を中心に住むようになり、やがて朝鮮全土へ広がっていったのである。もちろん彼らは現地の朝鮮人と交流せず、日本から持ち込んだ生活習慣や文化を守り通し、朝鮮の日本化を推し進めていたのだが、釜山はその始発駅だったのである。

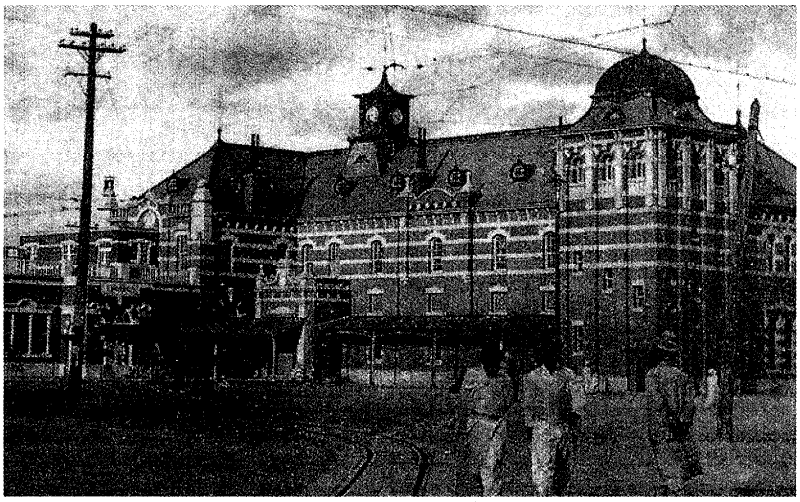
このような釜山の重要性を、独歩の作品を通じていち早く認識していた廉想渉は、異郷の地に移り住んだ「帰去来」の登場人物たちのその後の生活、すなわち釜山に移住しながらも朝鮮人と付き合うことなく、むしろ日本の文化や生活習慣を釜山にもたらすことによって釜山の町並みが次々と日本化されていく現状を浮き彫りにした「万歳前」を執筆し、韓国近代文学に故郷意識を持ち込んだのである。

廉想渉は、植民地下の釜山の運命を最も鋭く認識していた作家として知られるが[29]、彼の釜山認識に独歩の作品が影響を及ぼしていることは言うまでもない。

七、帰郷小説という新しい小説ジャンル

「万歳前」は、韓国近代小説史上はじめて帰郷小説という新たなジャンルを生み出した作品[30]として知られるが、これまで見てきたように独歩の帰省小説「帰去来」から内容やプロット、主題など多くのヒントを得ている。何よりも廉想渉を刺激したのは汽車と船と馬車を乗り継いで他郷から故郷へ戻るという帰郷モチーフである。

実は、近代韓国文学の幕開けを告げる新小説の特徴の一つに主人公たちの海外留学が挙げられる。[31]李人植の『血の涙』（一九〇六）『雉岳山』（一九〇八）『銀世界』（一九



【図４】釜山駅（二階は鉄道ホテル）

○八)、李海朝の『鴛鴦の図』(一九一一)、崔燦植の『秋月色』(一九一二)『春夢』(一九一四)には、主人公がみな新しい知識を求めてアメリカや日本へ出かけていくという離郷モチーフが用いられている。開化期の新小説が海外留学を多く取りあげたのは、日本のように学問をおさめて立身出世しようとする功名心に基づくものではなく、無知蒙昧の状態から脱して民族的に覚醒しようとする真理が背景にある。[33] つまり、海外留学こそが古い価値観や制度を打ち壊し、近代化を実現する道だと信じていたからである。

だが、一九一〇年に日本の植民地になって以来、故郷から出て行く離郷モチーフはすっかり影を潜め、他郷から故郷へ帰ってくるという帰郷モチーフが現われるようになる。[34] 日本の植民地支配による国権や故郷の喪失はすべての韓国人を窮乏させ、放浪や移住を余儀なくさせた。しかし、他郷に流出したからといってどこにもユートピアなどなく、貧困のどん底を流浪しながら再び故郷に戻ってくる人も少なくなかった。朱耀翰「村の家」(一九一七)、廉想渉「万歳前」(一九二二/二四)、崔曙海「故国」(一九二四)、玄鎮健「故郷」(一九二六)、趙明姫「洛東江」(一九二六)、韓雪野「過渡期」(一九二九)などには、離郷を余儀なくさせられた主人公たちが久しぶりに帰郷し、植民地下の荒れ果てた故郷の姿を目にする様子が描かれている。

注目すべきなのは、これらの帰郷小説には帰郷の旅そのものも、あるいは故郷にたどり着くまでの旅の過程が全く描かれていないことである。満州や沿海州、日本などといった遠方から帰郷してきた彼らは当然のことながら汽車や船、人力車などを使ってそれぞれの故郷に向かっていたはずなのに、いずれの作品も「チャンソニは四年ぶりに昔の土地に帰ってきた」(「過渡期」)とか、あるいは「大望を抱いて故郷を去っていたウンシムが再び朝鮮に現われたのは癸亥年三月中旬であった」(「故国」)という具合に、故郷に帰ってきた瞬間から物語が始まっている。だが、廉想渉の「万歳前」は違っていた。主人公が帰郷の決意を固めるところから書き出され、電車、汽車、船、人力車を乗り継いでの帰郷の様子が実に詳しく描かれている。

弁当箱のおかず入れのようにすし詰めで、そこここで押し合いへし合いながら窮屈な中で座っている間に、やっとうとうとして目が覚めたが、まだ夜が明けるには一、二時間ほど間があるようす。車内は夜の冷気でひんやりしていたが、人いきれとタバコの煙で空気な濁っていた。再び目をつむってみたが、なかなか寝付かれそうにもなく、外套を引っかけた肩が薄ら寒いので、座り直してタバコに火を付けて加えてから、網棚に載せた静子のくれた風呂敷包みを下ろした。(二七頁)

これは東京駅を出発したばかりの車中の風景を描いたものであるが、車中の描写ばかりでなく、釜山駅から金泉、永同、大田を経て終点の南大門駅に着くまでの行く先々の駅や車中、車窓の風景が詳細に描かれている。次の文はようやくソウルにたどり着いた汽車が終点の南大門駅に到着するまでの状況を描いた場面である。

もうじきソウルだな!と思うと、それでもうれしくなくはなかった。永登浦を過ぎ、漢江鉄橋を渡るときには、大理石で暗渠にふたをしたような、人影とてない川一面の氷を眺めながら、思わず一度、背伸びをした。龍山駅まで来ると、後ろのキーセンが立ち上がって身繕いをしながら、今にも降りるようにして私をしげしげと眺めてもじもじしていたが、列車が発車しようとして呼び子を吹く音がすると、そのまま座ってしまった。始めてソウルに来たキーセンではないようなのだが、知り合いの顔がなくて不安になったものか訝しいことだった。私が自分の座席に戻って網棚の荷物を下ろして座り直した後も、私の一挙一動を目で追いながら何やら話しかけそうにしながらも口を開けないようだった。ソウルで訪ねていく道を教えてもらおうというのやら、

何やらわけがあるようで、こちらから先に声をかけたかったが、大学の制服制帽であることに敬意を表して口をつぐんでしまった。

汽車は南大門に到着した。(一二〇頁)

南大門駅までの道のりや終点に近づくにつれて降りる支度をする人々の様

子が実によく描かれている。これはかつてなかった、まったく新しい見方である。いったいなぜこのような作品が突如書かれたのか、不思議に思うが、廉想渉の六年間に渡る日本留学を考慮すると、自ずと分かってくる。

すでに前で見てきたように、日本では明治二十年代から三十年代にかけて帰郷や故郷をテーマとした帰省小説が流行っていた。これらの作品を紐解いてみると、帰省の旅、すなわち主人公が帰省の決意を固めるところから書き出され、汽車と船、馬車とを乗り継いでの旅の様子が詳しく描かれている。ただし、これらの作品をよく読んでみると、船や馬車の旅に関しては、「山の形にも笑ひ水の波立つにも面白がりて打興じ、白浜外浦大川和田、海辺の道の景色に浮かれて」とか、あるいは「列べて走らす車の上和かき風にも身を煽がせつ」という具合に、旅の情緒が描かれているのに対して、汽車の旅の場合は、「国府津よりは汽車一飛、新橋にこそ着にけれ」と実に素っ気なくすませている。[34] 一八七二年九月に新橋と横浜の間に鉄道が開通されて以来、汽車は小説にとって最新のモードの一つとして注目され、作家たちもこぞって取り入れるようになったが、そのほとんどの作品には「汽車旅行独特の情緒」が描かれていない。

このような現象について、新保邦寛氏は「汽車以前の旅に慣れ親しんでいる人の目にはスピードの速い鉄道旅行がもたらす新しい風景に気づくことが出来な」かったからだと指摘し、そのタブーを破ったのがほかならぬ国木田独歩であるという。[35] 独歩は、一九〇一年五月に帰省小説「帰去来」を発表しているが、この作品には他の帰省小説と違って汽車の旅が詳細に描かれている。次の文は「帰去来」の主人公が故郷に向かって東京駅を出発した直後の車中の様子である。

> 汽車はさまでこまず、自分の臥べる余地は十分あつた。雨の降り込むのを恐れて、風上の窓を閉め切て居たから何とも言へぬ熱さである。隅の西洋人は顔をしかめて居る。自分も堪え兼ねて後の窓を少し開けて見たが、品川沖から吹き付ける風で雨は遠慮なく舞込む、仕方なく又閉めると、「夕立だ、今に晴れる」と言つた声が彼方の方でした。
>
> 大森を過ぎると、雨は果たして小やみになつた。人々いそがしく窓を開け放つ、雨の名残が心地よく舞込む、吐息をついて顔を見合はす、巻煙草に火を移ける者もある、しかし誰一人話をする者はなかつた。
>
> 窓から頭を出してみると、早や天際に雲ぎれがして、夏の夜の蒼い空が彼方此方に黒澄んで、涼しい星の光がきらめいて居る。田舎の灯火があちこちに見える、それも星のやうである。田面一面に蛙が稲の香をこめた小気味よくよい風が吹き付ける。
>
> 「ああ此香だ、此香だ、」自分は思つた、「己は確かに今わが故郷に帰りつつあるのである。」（三一七頁）

汽車の中の様子や車窓から見える風景が実によく描かれていることがわかる。新保邦寛氏は、独歩の「帰去来」は、日本近代文学史上はじめて車中の様子を書いた先駆的な作品であり、彼が他の文学者が見向きもしなかった車中の風景を描くことが出来たのは、「鉄道によってもたらされた新しい風景」にいち早く気づいていたからにほかならないと指摘している。[36] つまり、伝統的な風景観の呪縛にとらわれていなかったからこそ、車窓の外の景観が鑑賞できたわけであるが、それ故にこそ独歩の作品は韓国の留学生、とりわけ一九二〇年代から韓国文壇をリードし始めるようになった廉想渉に強い影響を及ぼしたのである。

廉想渉は、立身出世を夢みて大都会に遊学しながらも、帰郷を余儀なくさせられた遊学青年たちが汽車と船と馬車を乗り継いで故郷に帰っていく様子を描いた日本の帰省小説に強い関心を持っていたに違いない。実は、一九二〇年代当時、朝鮮では開化期以来様々な理由で離郷を余儀なくさせられていた人たち、例えば併合前後に日本に留学していた知識人、また満州や上海などを拠点に独立運動を繰り広げられていた抗日運動家、あるいは土地調査事業などによる植民地政策で土地を失って放浪・移住を繰り返している農民らの帰国ラッシュが起きていた。この帰郷ブームは当然ながら小説にとって格好のテーマとなったが、中でも廉想渉の「万歳前」は、汽車という最新の乗り物を使って帰郷する、という斬新な手法を用い、他の帰郷小説と一線を画

した。実は、一九〇〇年ソウルと仁川間に鉄道が敷設されて以来、汽車は近代生活に不可欠な乗り物として人々の生活の中に浸透していったが、ほとんどの人たちにとって汽車旅行は依然としてなじめないものと映っていたのである。[8]

ところが、廉想渉は早い時期から汽車旅行に強い関心を示し、処女作「標本室の青蛙」（一九二一）では日本から帰省した主人公が友達とソウルから平壌を経て鎮南浦まで汽車旅行をする様子が描かれている。もちろん「万歳前」のように車中や車窓の風景には一顧だにしない素っ気ない旅行ではあったが、これが一年後の「万歳前」の執筆に影響を及ぼしたことは言うまでもない。

廉想渉は、一九二〇年代、当時汽車旅行がようやく人々の意識に浸透しつつあるという現象に注目し、留学中に読んでいた日本の帰省小説、とりわけ国木田独歩の「帰去来」の影響を受けて韓国近代文学史上初めて船や汽車、人力車などを使って帰省する主人公が、故郷に近づくにつれ、故郷の置かれた現実が見えてきて、ついには故郷を「墓地」と、そこに生きる人たちを「ウジ」と思うようになる、という斬新な作品を執筆し、韓国近代文学に故郷の意識を持ち込み、帰郷小説という新しいジャンルを提供した。この点はもっと評価されてしかるべきであろう。

実は、この「墓地」としての故郷のイメージは「万歳前」以後、執筆されたほとんどの帰郷小説に共通に見られるテーマである。つまり、「万歳前」は韓国近代文学における帰郷小説の一つの模範を提供することとなったのである。

植民地下の韓国の文学者にとって故郷とは、もはや心を癒し、やすらぎを得る場所ではなくなっていたのであろう。故郷は様々な問題を抱えており、なおかつ危機にさらされていた。ユートピアであり、母なる空間であるはずの故郷に対して、墓地という正反対のイメージを与えた当時の韓国の文学者の心情は、国木田独歩や宮崎湖処子などのロマンティシストにははかり知れないものがあったろう。廉想渉が独歩の帰省小説から帰郷モチーフをとりこみながらも、まったく違う故郷の意味を見いだしたのは、植民地下という時代状況に対する深い認識があったからにほかならない。

註

(1) 北野昭彦「宮崎湖処子『帰省』と〈故郷〉に取材した諸作」（『宮崎湖処子・国木田独歩の詩と小説』和泉書院、一九九三年）一六頁。

(2) 前田愛「明治立身出世主義の系譜―『西国立志編』から『帰省』まで―」（『文学』一九六五年四月）。

(3) 北野昭彦、前掲書に同じ。

(4) 北野昭彦、前掲書に同じ。

(5) 山田博光「湖処子と独歩―帰省小説をめぐって―」（『国木田独歩論考』創世記、一九七八年）一三九頁。

(6) 岩崎文人「『帰去来』論」（『文教国文学』一九七六年年三月）。

(7) 李大揆「帰郷小説研究序説」（『韓国近代帰郷小説研究』以會、一九九五年）一一～三七頁参照。

(8) 帰郷や離郷、異郷は戦後韓国文学にとって重要なモチーフの一つである。過酷な植民地支配から逃れるために海外への移住を余儀なくさせられていた人たちは、一九四五年解放されるやいなや長い間離れていた故郷を目指して世界各地から帰ってきた。だが、植民地からの解放は朝鮮半島が南北に分断される時代の始まりを意味することでもあったので新たな故郷喪失者が生まれてきた。一方、一九七〇年代に入ると、韓国社会の産業化・都市化に伴い、農村から都市へと異郷した人たちが故郷と異郷で行き場を失い、さまよう人たちが出現した。許俊『残燈』（一九四六）、蔡萬植『歴路』（一九四六）、廉想渉『解放の息子』（一九四九）、金承玉『霧津紀行』（一九六四）、黄晳暎『森浦に行く道』（一九七三）、金源一『夕焼け』（一九七七）、文俊泰『とらの音』（一九七七）、宋基源『月行』（一九七七）、宋基源『再び月門里にて』（一九八三）、趙廷来『焚火一人間の門』（一九八三）などはその代表的な作品である。

(9) 金充植「初期三部作の構成」（『廉想渉研究』ソウル大学出版部、一九八七年）。

(10) 金宇鐘著・長璋吉訳註、『韓国現代小説史』（龍渓社、一九七五）一五四頁。
(11) 李大揆、前掲書「十九頁～二十四頁」参照。
(12) 「芸苑愚語」（『文庫』三十四巻六号、明治四十年八月）。
(13) 滝藤満義「様々な帰郷」（『国木田独歩論』塙書房、一九八六）二一七頁。
花森重行「反帰省小説としての『帰去来』―国木田独歩における「連続」と「驚き」」（『言語文化研究』十二巻三号、立命館大学国際言語文化研究所、二〇〇〇年十一月号）。
(14) 滝藤満義、前掲書一九七頁。
(15) 桑原伸一によれば、独歩は、一八九一年五月から翌年六月まで熊毛群麻郷村に帰郷した際に、同村の財産家である石崎松浜衛の次女とみ（十八才）にひそかに心を寄せていた。だが、とみは両親の反対によって、朝鮮、釜山の醤油醸造業伊東小太郎の元へ嫁ぎ、独歩の恋愛はあっけなく終わってしまったという。つまり、「帰去来」における峰雄の悲恋話はこの時の体験に基づいたものである。
(16) 北野昭彦、前掲書に同じ。
(17) 国木田独歩「帰去来」（『国木田独歩全集』学習出版社、一九九六年）以後頁数のみ記載。
(18) 廉想渉著・白川豊訳『万歳前』（勉誠出版、二〇〇三）以後頁数のみ記載。
(19) 岡部牧夫『海を渡った日本人』（山川出版社、二〇〇二）二八～三〇頁。
(20) 岡部牧夫、前掲書に同じ。
(21) 滝藤満義、前掲書に同じ。
(22) 北野昭彦「『帰去来』―「山林の自由の生活」と現実との衝突」（『国木田独歩の文学』桜楓社、一九七四年）一二二頁。
(23) 竹内洋『立身出世と日本人』（NHK人間大学、一九九六）参照。門脇厚司編集・解説『現代のエスプリ・立身出世』（至文堂、一九七七）参照。
(24) 木村健二『在朝日本人の社会史』（未来社、一九八九）三〇～五九頁。
(25) 木村健二、前掲書に同じ。
高崎宗司「釜山に上陸した日本人」（『植民地朝鮮の日本人』岩波書店、二〇〇二）一～二五頁参照。
(26) 桑原伸一『国木田独歩―山口時代の研究』（笠間書院刊、一九七二）一四一頁。
(27) 桑原伸一、前掲書一六〇頁。
(28) 木村健二、前掲書五八頁。
(29) 朴チョノン『魅惑の疾走・近代の横断―鉄道で顧みた近代の風景』（サンチョロム、二〇〇三）二二一頁。
(30) 韓国における近代帰郷小説の系譜は廉想渉の「万歳前」（一九二二）から始まると言われている。しかし、すでに一九一〇年代には帰郷モチーフは用いられていた。李常春の「岐路」（『青春』一九一七年十一月）は、田舎から上京した主人公が様々な苦難を乗り越えて立身出世し、故郷に錦を飾るという内容の、いわゆる立身出世型帰郷小説である。一方朱耀翰の「村の家」（『青春』一九一七年十一月）は、都会に出て新学問を修めて久しぶりに帰郷した主人公が、故郷の家族や友人、村の人々に触れていくに連れ、彼らが昔と全く変わっていないことが見えてきて、ついには閉鎖的で古い価値観の支配する故郷に自分の居場所を見つけられず再び故郷を出て行こうとするという内容の帰郷小説である。とりわけ「村の家」は他郷から帰郷した主人公が再び離郷しようとうする小説構造において「万歳前」と類似している。廉想渉が「村の家」を読んでいたかどうかは分からない。ただ、「村の家」の執筆時期が日本の明治学院中等部に在学中であるという事実を考慮すると、朱耀翰も日本の帰省小説を意識していたのかも知れない。
(31) 曺南鉉「韓国現代小説略史」（『韓国文学の概観』語文閣、一九八六）六〇頁。
(32) 金宇鐘著・長璋吉訳註、『韓国現代小説史』（龍渓書舎、一九七五）一六九頁。

(33) 李在銑著・丁貴連・筒井真樹子訳『韓国文学はどこから来たのか』白帝社、二〇〇五）二〇四～二〇八頁。

(34) 新保邦寛「車窓の風景・〈眼〉の解放」（『独歩と藤村―明治三十年代文学のコスモロジー』有隣堂、一九九六）一九八頁。

(35) 新保邦寛、前掲書一九九頁。

(36) 新保邦寛、前掲書に同じ。

(37) 鉄道が韓国人の感性や生活にすっかり根をおろすようになったのは一九三〇年代に入ってからである。しかしながら、李光洙はすでに一九一〇年代頃から鉄道の利便性や近代性を積極的に小説世界に取り入れた作品を多く発表していた。李光洙は、処女作「愛か」（一九〇九）をはじめ『無情』（一九一七）「幼き友へ」（一九一七）『土』（一九三二）『再生』（一九三五）といった作品を通じて当時どの作家よりも早くかつ、具体的な形で鉄道を取り上げたばかりでなく、汽車という近代的な空間を使った男女の出会い（車中奇縁）や車内での読書行為（車中読書）、鉄道自殺といった、それまでに韓国文学及び文化には存在しなかったモダンカルチャーを描き挙げ、近代化の象徴としての鉄道像を提示した。ただ、「幼き友へ」に取り上げられた車中奇縁のモチーフに独歩の「おとづれ」の影響が指摘されるなど、李光洙の鉄道認識が日本経由によるものであることはいうまでもない。

【図版出典一覧】

図1……『写真で見る近代韓国(上)』（瑞文堂、一九八六）

図2……岡部牧夫『海を渡った日本人』（山川出版社、二〇〇二）

図3……福田清人編・本田浩『国木田独歩』（清水書院、一九六八）

図4……『写真で見る近代韓国(上)』（瑞文堂、一九八六）

논문요지

동아시아의 근대와 고향
－염상섭「만세전」과 구니키다 돗보「귀거래」－

정귀련

염상섭의 「만세전」(1924)은 “식민지라는 혹독한 현실속에서 고뇌하는 조선 지식인 청년의 정신적인 방황과 성장을 그린 일종의 <교양소설>”로 알려진 작품이다. 그러나 한편으로는 한국근대소설사상 처음으로 <귀향소설>이라는 문학장르를 다루었다는 점에서 주목을 받은 작품이기도 하다.

귀향소설이라는 시점에서 「만세전」을 다시 읽어 보면 「만세전」은 식민지 치하를 살아가는 “인텔리 청년 특유의 니힐리즘”을 드러낸 “일종의 교양소설”이라고만으로는 설명하기 어려운 주제가 내포되어 있다. 왜냐하면 「만세전」은 동경에 유학중인 주인공이 기차와 배와 인력거를 갈아타고 고향으로 귀향하는 도중 식민지 치하의 고향(조선)의 현실을 “구데기가 끓는 무덤”으로 인식하여 한국근대문학에 새로운 고향 의식을 심어넣었기 때문이다. 문제는 염상섭이 발견한 이 <무덤>으로서의 고향 모티브가 「만세전」이후 집필된 거의 모든 귀향소설에 나타나 있다는 점이다. 말하자면 「만세전」은 한국근대문학에 귀향소설의 한 예를 제공한 작품이라고 말할 수 있는데 실은 이 작품에 일본의 귀성 (帰省) 소설, 특히 구니키다 돗보의 「귀거래」(1901)가 많은 영향을 끼쳤다.

본고에서는 염상섭이 구니키다 돗보의 귀성소설「귀거래」를 단서로 하여 한국근대문학사상 처음으로 귀향소설이라는 문학장르를 창출해 내는 과정을 밝혀냈다.

(2006年 5 月30日受理)